様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３９１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１６８５９

研究課題名（和文）英語独立分詞構文の主語の認可と統語構造に関する通時的研究

研究課題名（英文）A Diachronic Study on the Licensing of Subjects and the Syntactic Structure of the Absolute Participial Constructions in English

研究代表者
中川　聡（Nakagawa, Satoshi）

藤田保健衛生大学・医学部・講師

研究者番号：９０５６６９９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：　古英語から中英語にかけての独立分詞構文の通時的変化をChomsky(2013)で提案されているラベル付けアルゴリズムの観点から説明した。古英語の独立分詞構文では主語に与格が付与され、現在分詞も主語と性・数・格の点で一致を示していた。本研究では古英語の独立分詞構文は空のPを主要部とするPP構造であると提案し、与格はPによって主語と現在分詞に付与されていたと主張した。またPの補部は現在分詞がφ素性を有していたため、主語との併合の結果<φ，φ>とラベル付けられると分析した。中英語に入り、現在分詞がφ素性を失ったためPの補部が<φ,φ>とラベル付けられなくり、独立分詞構文は衰退したと分析した。

研究成果の概要（英文）：The diachronic change of absolute participial constructions from OE to ME is accounted for from the viewpoint of the Labeling Algorithm proposed by Chomsky (2013).In OE, dative Case was assigned to the subjects of absolute participial constructions and present participles agreed with them in gender, number, and case.  This study proposes that the absolute participial constructions were headed by a null P and the null P assigned dative Case to both their subjects and the present participles. Furthermore, the complement of the null P was labeled as <φ, φ>as a result of the merger of the subjects and the present participles, because the present participles had φ-features.
It is argued that in ME, present participles lost their φ-features and then the complement of the null P was not labeled as <φ, φ>,  absolute participial constructions became obsolete.

研究分野：統語論

キーワード：独立分詞構文　PP構造　φ素性の消失

## １．研究開始当初の背景

(1)　古英語の独立分詞構文については、先行研究ではラテン語で観察された奪格主語を伴う独立分詞構文（奪格独立分詞構文）を翻訳する過程で英語に広がったという記述的説明に留まっていた。古英語の与格主語を伴う独立分詞構文（与格独立分詞構文）の統語構造、与格がどのように主語に付与されるのか、主語と現在分詞の間に観察される性・数。格の一致がどのようなメカニズムでなされていたかを説明する統語的観点からの分析はなされていなかった。

(2)　中英語の独立分詞構文については、先行研究では古英語で観察された与格独立分詞構文が消滅し、それに替わるように主格主語を伴う独立分詞構文（主格独立分詞構文）が 15 世紀から観察されるようになったことと、古英語で観察された主語と現在分詞の間の性・数・格の点での一致が消滅したことが述べられていた。しかし、上記の一連の変化を説明する統語的分析はこれまでなされていなかった。

(3)　初期近代英語以降の独立分詞構文については、Nakagawa (2011)において主語への主格付与や統語構造に関して統語的分析がなされていたが、古英語や中英語にかけての独立分詞構文の主語に対する格の点での認可や、統語構造に関する分析はなされていなかった。

## ２．研究の目的

(1)　古英語の独立分詞構文の統語構造を明らかにすることと、当該構文に現れる主語や現在分詞にどのようなメカニズムで与格が付与されていたかを統語的観点から説明することである。

(2)　初期中英語において古英語で観察された与格の独立分詞構文が減少、消滅し、それに替わるように主格独立分詞構文が観察され始めるようになった統語的要因を明らかにし、その要因に基づいて統語的変化を説明することである。

(3)　古英語から中英語にかけて独立分詞構文において主語と現在分詞の一致が観察されなくなったが、この言語事実に対して統語的観点から説明を与えることである。

## ３．研究の方法

(1)　古英語の独立分詞構文については先行研究でラテン語の奪格独立分詞構文の翻訳を通して英語に広がったと記述されている。この点に着目し、ラテン語での奪格付与と同様のメカニズムで付与されるという観点から説明を試みた。このことに関する先行研究として Emonds (2014)が挙げられる。Emonds (2014)ではラテン語の奪格と古英語の与格は事実上同じ意味役割を反映していた内在格であったと論じられていること、奪格の付与には空のＰが関わっていたことが主張されており、本研究でもこの Emonds (2014)の分析に従って、与格付与について統語的観点からの説明を試みた。

(2)　古英語の与各独立分詞構文の統語構造が動詞句なのか節構造なのかを確認し、その証拠となる用例を探すために電子コーパスを用いた調査を行った。

(3)　古英語の与格独立分詞構文では主語と現在分詞が性・数・格の点で一致を示していたことから、この点を説明する統語的分析を援用した。具体的には現在分詞を形成する-ende 接辞がφ素性を有しており、現在分詞と主語が Agree 関係に入るとき、両者のφ素性に同じ値が付与されることを説明できる統語分析を援用することを試みた。

(4)　中英語では独立分詞構文において主語と現在分詞の間の性・数・格の点での一致が観察されなくなったことに着目し、この一致の消失が主格独立分詞構文の発達へとつながったと分析した。具体的には現在分詞を形成する-ende 接辞が中英語にφ素性を失ったと分析した。

(5)　古英語で観察された与格独立分詞構文が中英語に観察されなくなったことを Chomsky (2013)で提案されている Labeling Algorithm の観点から説明することを試みた。Chomsky (2013) によると Labeling Algorithm はある 2 つの統語対象が併合する際に、ラベルを探査するメカニズムであり、それにより、主要部のラベルが併合の結果として形成される統語対象のラベルとして決定される。しかし、句と句が併合する場合はどちらの主要部のラベルが選ばれるか Labeling Algorithm によって決定されず、その場合は両者に共通の素性がラベルとして選ばれるか、移動した統語対象のコピーはラベル決定には不可視であるという仮定のもと、どちらかの句が統語構造の上位に移動することでラベルが決定されると提案されている。本研究においては独立分詞構文の主語と-ende 接辞の併合の結果形成される新たな統語対象のラベルが決定されるかが独立分詞構文の通時的変化に大きな影響を与えるという分析を試みた。

## ４．研究成果

(1)　古英語の独立分詞構文における与格付与について、ラテン語の奪格が音韻的に空の前置詞によって付与されているという Emonds (2014)の分析を援用し、同じ方策で、すなわち、古英語の独立分詞構文においても音韻的に空の前置詞によって与格が主語と現在分詞に付与されていると分析した。この

点に関して、古英語の独立分詞構文では主語と現在分詞が数・性・格の点で一致を示していたが、古英語の現在分詞を形成する-ende 接辞がφ素性を有していたと提案し、Pesetsky and Torrego (2004)で提案された、素性がAgree関係に入る際に連鎖を形成するという素性共有に基づくAgreeシステムを採用することで説明を与えた。すなわち、主語と-ende 接辞が Agree 関係に入ったときにそれぞれのφ素性と格素性が連鎖を形成し、結果両者が同じ素性の値を共有するという点で、性・数・格の一致を説明した。

(2)　電子コーパスを用いた調査の結果、古英語の独立分詞構文が節構造であることを明確に示す事例が観察されなかった。一方で、現在分詞が対格目的語を選択していた事例や、付加詞が共起している事例が観察された。この調査結果に基づいて、古英語の独立分詞構文は節構造ではなく、vP までの投射しか含んでいなかったと分析した。また Emonds (2014)のラテン語の奪格付与に関する分析を援用し、与格の付与に音韻的に空の前置詞が関わっていると分析するため、古英語の独立分詞構文は空の P が vP を補部として選択する PP 構造であったと主張した。

(3)　中英語になると主語と現在分詞の性・数・格の点での一致が消滅した。このことは中英語に入り、現在分詞を形成する-ende 接辞がφ素性を持たなくなったためと分析した。このことにより、vP の主要部を占める現在分詞とその指定部に主語 DP が併合した場合に、両者に共通の素性（φ素性）が存在しなくなり、Chomsky (2013)で提案されている Labeling Algorithm の観点から＜φ,φ＞と適切にラベル付けがなされなくったと分析した。この結果として、中英語になると独立分詞構文が減少したと説明を与えた。

Chomsky (2013)によると句である 2 つの統語対象が併合するときラベル決定のためにどちらかの句が移動すると提案されている。よって、中英語の独立分詞構文においても主語が上位の句の指定部（この場合は[Spec,PP]）まで移動することが考えられる。しかし、この場合であっても主要部である空の P はφ素性を有していないため主語と併合してもラベル決定に関与する共通の素性が存在せず、独立分詞構文のラベルが決定されなくなってしまう。したがって、この観点からも中英語に独立分詞構文が観察されなくなったことが説明されることになる。

(4)　15 世紀になり、主語に主格が付与されている分詞構文が観察され始めたため、独立分詞構文は節構造を伴うように発達したと分析した。Chomsky (2004)以降、主格付与には T だけでなく、C も関与すると提案されていることから、独立分詞構文は CP 構造に変化したと主張した。

(5)　独立分詞構文の CP 構造への変化は動詞的な構造が節構造へ変化するという発達過程であり、この過程は他の構文でも観察される変化と類似していると分析した。例えば独立分詞構文と類似している動詞的動名詞も同じ発達の経緯をたどっていると考えられる。動詞的動名詞は後期中英語から観察され始め、当初は動詞的な内部構造であったが、初期近代英語に入り、節的構造を持つようなったと多くの先行研究で論じられている。したがって、古英語から中英語にかけての独立分詞構文の通時的発達は見かけ上類似している動詞的動名詞の通時的発達過程と共通点があるということが示されたと考えられる。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計 1 件）

① 中川　聡、古英語、中英語における独立分詞構文の通時的発達について、日本英文学会中部支部第 69 回大会、2017

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

## ６．研究組織

(1)研究代表者

中川　聡（NAKAGAWA, Satoshi）
藤田保健衛生大学・講師
研究者番号：９０５６６９９４

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)研究協力者

(　　)